

社会福祉学と財政学

私は財政学の研究者であって、社会福祉学に関しては門外漢である。とはいえ、財政学も社会福祉学も学際的な学問であるという意味で、共有する特色のある学問だと考えてきた。

財政学は「隣界線上の科学」といわれる。経済学、政治学、社会学、法学、経営学、会計学など社会科学の諸科学の隣界線上の学問として、財政学は位置づけられているからである。それはメダルの裏側から表現すれば、財政現象は経済学からもアプローチできれば、政治学からもアプローチできれば、社会学からもアプローチできるし、法学からも、アプローチできることをも意味している。

私のような社会福祉学の門外漢からいえば、社会福祉学も財政学と同様に、「隣界線上の科学」だと考えてきた。そのため社会福祉現象には、経済学からもアプローチできれば、政治学からも社会学からも法学からもアプローチできることになる。

ところが、私が浅学であることに起因するとは思われるけれども、財政学の研究者からみると、社会福祉学には財政学とは相違する学問としての性格のあることに気づかされる。それは財政学では、財政現象を財政学として独自に分析する方法論を求めて苦悶しているからである。確かに、財政現象は経済学でも政治学でも社会学でも、さらには法学からでも分析することは可能だけれども、財政現象を研究対象とする独自の社会科学としての財政学は、財政現象をどのように分析すべきかをいつも問い直している。

というよりも、学際的な学問であればあるこそ、他の学問との相違を明確にし、学際的領域を研究する独自の学問であることを弁証しなければならないはずである。財政学は近代社会科学のメイン・ストリームといってよい政治経済学 (political economy) に対する根源的批判から誕生している。

経済学に限らず、近代社会科学は、アダム・スミス (Adam Smith) を始祖とする政治経済学に始まるといってよい。しかし、19 世紀に生じる社会問題を背景にして、政治経済学が前提としていた人間観あるいは社会観に対する根源的な批判をともないながら、フランスで社会学が、ドイツでは新歴史学派から財政学が産声をあげる。

政治経済学が前提としているホモエコノミクス (経済人) という孤立した人間観を批判して、コント (Auguste Comte) の造語である社会学 (sociologie) がフランスで生まれる。このフランスで誕生した社会学の影響を受けながら、ドイツの新歴史学派からシュタイン (Lorentz von Stein) シェフレ (Albert E. F. Schäffle)、ワグナー (Adolf Wagner) という三巨星によって財政学は打ち立てられる。

もちろん、社会科学で新しい学問を提起しようとすれば、独自性を主張するために社会科学の方法論争が生じる。社会政策学会に結集し、財政学を生み出した新歴史学派は、シュモラー (Gustav von Schmoller) を代表にし、経済学のメイン・ストリームとなった新古典派のメンガー (Carl Menger) とも、さらには社会学者のマックス・ウェーバー (Max Weber) とも、社会科学の方法論を展開していく。

このように財政学は、他の社会科学との緊張関係のうちに、自己の学問の独自性を主張してきた。私が財政社会学という方法論を提唱しているのも、そのためである。

ところが、社会福祉学を門外漢として学んでいっても、社会福祉学を独自の社会科学として確立していこうとする動きを把握しにくい。それは社会福祉現象という学問の対象の特色によるものかもしれない。財政学の場合は、学問の対象たる財政現象を容易に確定できる。予算に盛り込まれている現象と定義してなければよいからである。

しかし、学問の対象が多義的であったとしても、社会福祉学が独自の科学としての存在を主張するのであれば、その独自性を模索する必要がある。この雑誌がそうした模索の場として機能することを願っている。

2018 年 3 月